

## VI 付編 資料紹介等

### 1 齋藤秀平氏旧蔵の縄文土器・土師器

齋藤秀平氏（以下「齋藤氏」という。）が旧蔵していた縄文土器1点と土師器1点について資料紹介を行う。

**収集の経緯** 齋藤氏旧蔵資料は、平成4年に新潟市内の齋藤氏宅から「齋藤秀平氏収集文書」の一部と共に収集した。「齋藤秀平氏収集文書」は歴史文化課歴史資料整備室に保管され、土器など数点からなる齋藤氏旧蔵の考古資料は新潟市文化財センターで保管している。

（金田拓也）

**齋藤秀平氏について** 齋藤氏は、明治17（1884）年に新潟県北蒲原郡中条町（現 胎内市）に生まれ、新潟県高田師範学校を卒業後に師範学校教諭となったが、その傍ら昭和初期から新潟県が刊行した『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』の調査委員として作成に携わるなど、新潟県内各地で考古学研究を行った。その成果は、『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯に集約されるなど〔新潟県1937〕、新潟県考古学界の草創期に新潟県の考古学の発展に尽力した。（寺崎裕助）

**縄文土器（図1-1）** 遺存状態は良く、口縁部が2割余り欠損するほかは完形である。口縁部外面に「西頸城郡糸魚川町長者ヶ原」、内面に「西頸城長者ヶ原」・「昭和□年」というような注記を読み取ることができたことから、この土器は、現在の糸魚川市長者ヶ原遺跡から出土したものと考えられる。

長者ヶ原遺跡は、糸魚川市大字一ノ宮字栗畑他に所在し、市街地南側の標高90～110m前後の台地上に位置を占めている。遺跡は、北陸地方を代表する縄文時代中期の集落跡であるばかりではなく、日本列島における翡翠加工の存在を初めて実証した遺跡として国史跡に指定されており、その面積は約14haにおよんでいる。

齋藤氏も昭和4（1929）年に長者ヶ原遺跡で発掘調査を行っており、その時得た土器をもって長者ヶ原式を設定したものと考えられる。この縄文土器も、内面に「昭和□年」という注記が残されていたことから、昭和4（1929）年の発掘調査で出土した可能性がある。齋藤氏は長者ヶ原式土器について、「器は二つの種類があって、一は其の大きさは坪穴式程度の深鉢を中心に、多少其の口縁部の張り出した類で、（中略）器の全面或は口縁部に微隆起線紋が展開する。微隆起線はおおむね幾つかの区割りを作り、その内外に爪形紋、隆起線紋、刺突

紋が従う。（中略）次は極めて厚手で土質は粗、稀に雲母粉末を含み、赤褐色を呈し、大形品に富み、其の概形は大体、筒形乃至深鉢形にして、口縁の内彎しつつ開くのが多い。雄渾な隆起線紋や立体装飾が付加される為、種々に変化した形に感じさせる。即ち此の式は隆起線紋の発達している点で、石器時代中最高峰を示すが、（中略）半肉彫風のマッシーヴな曲線紋を形成し、之に爪形や曲直線を添加して、殆んど器面に空白部を作らない。〔新潟県1937〕と述べ、長者ヶ原式には2つのタイプがあることを指摘している。この2つのタイプは、前者は北陸地方の所謂新保・新崎式、後者は北陸地方の所謂上山田・天神山式と考えられている。さしずめ今回紹介する縄文土器は、前者に当たる。

この土器は、器高13.3cm～13.5cm、口径9.6cm、底径5.7cmの法量を有する台付の小形深鉢である。脚部の高さは3.4cm、胴部最大径は中央にあつて9.2cmである。胴部は、底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁は平であるが、左右では器高が若干異なることから、左側にやや傾く。脚部は、底部から直線的に開くが、端部は内反気味で、全体としては湾曲を帯びる。

文様は、無文地に半截竹管を用いた2条1単位を基本とした平行沈線で描かれている。口縁部は無文帯である。頸部には横方向の平行沈線が1条めぐって、口縁部と胴部を画する。胴部は、3条1単位の縦位平行沈線で13に区画され、その形状は長大蓮華文の様である。

色調は、赤褐色を基調とするが、胴部上半以上は暗赤褐色を呈する。外面は、口縁部から胴部上半にかけての半分くらいの部分に、スス状・オコゲ状の炭化物の付着が認められる。また、胴部上半外面の一部に黒斑と思われる痕跡がみられる。内面は、底部近くの胴部下半の一部に、スス状の炭化物が付着している。胎土中には白色・黒色を主体とした砂粒が多く含まれており、中でも白色の砂粒の多さが際立っている。成形は、外面はそれほど丁寧ではなく、口縁部はある程度滑らかであるが、胴部や脚部はでこぼこしており、滑らかさに欠ける。一方、内面の成形は丁寧で、底部を除けば滑らかである。

時期と系統は、半截竹管を施文具として平行沈線で施文していること、胴部区画文が長大蓮華文に似ていることから、北陸地方の中期前葉新崎式の系統を引く土器、すなわち本県で言うところの千石原式土器に比定できるものと考えられる。千石原式土器は、新旧2段階に細分

されているが、この土器は長大蓮華文類似の区画文をもつことから、新式に相当するものと考えられる。

この土器のように脚台が付くものは、富山県や石川県といった北陸地方の縄文時代中期では、それほど珍しいものではなく、むしろ一般的なものに近い存在である。しかし、それはこの土器よりも新しい中期中葉の上山田・天神山式の段階のことである。この土器の時期に脚台が付く土器はほとんど知られておらず、全体像がうかがえるものは、本県では見附市羽黒遺跡出土の1個体のみである。その土器は、現存高14.4cmと紹介資料よりも少し大きい、小形の深鉢形土器の部類に入る。

一方紹介資料は、研究史的な観点においても興味深く、且つ貴重である。先述したようにこの資料は、内面に「昭和□年」という昭和一桁と思われる注記が残されていたことから、昭和4（1929）年の発掘調査で出土した可能性がうかがわれるが、その時の出土を特定できる土器は今まで確認されていない。また、『新潟懸史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯などに掲載されている資料は、その所在が不明で、現存の存否も明らかではない。そういう意味でもこの紹介資料は、「齋藤氏が収集した数少ない資料」ということで貴重である。（寺崎裕助）

**土師器（図1-2）** 遺存状態が良く、口縁部に若干の欠損があるが、ほぼ完形の資料である。内面に齋藤氏を書いたと考えられる注記があり、「中頸 斐大堅穴 松葉百歩発掘／昭和六、十一、二〇」と読める。『新潟懸史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯〔新潟県1920〕では、齋藤氏も発掘調査を行った中頸城郡斐太堅穴群の報告がされている。注記の「中頸 斐大堅穴」が、この斐太堅穴群を示していると考えられ、斐太堅穴群周辺で出土したものと考えられる。さらに、「松葉百歩」が詳しい発掘地点を示すものと考えられるが、詳細は不明である。また、「昭和六、十一、二〇」から、昭和6（1931）年11月20日に出土したものと考えられ、先述の第一輯が昭和5（1930）年刊行のため、第一輯刊行後に出土したものと考えられる。第一輯の斐太堅穴群とは、弥生時代の高地性集落として著名な国史跡斐太遺跡のことである。

土師器は、小形の甕と考えられる。底部が平底で、胴部は半ばに最大径を有する胴張形であり、口縁部

は強く外傾する。口径10.8cm、胴部最大径10.4cm、底径4.6cm、器高9.2cmを測る。胎土は、比較的粗く、石英・長石・角閃石・焼土粒などが多数含まれている。しかし一方で、雲母や海綿骨針などは見られない。色調は、内外面共ににぶい橙色を呈する。調整は、外面ではハケメが胴部の半ばから上部にかけて断続的に廻っている。さらに、その上に口縁部ではヨコナデ、胴部の下部ではケズリが確認できる。内面では、ヘラナデが全体に廻っており、口縁部にはその上にヨコナデが確認できる。

時期については、外面調整の特徴など他に例がないため、必ずしも判然としないが、形態などから春日編年〔春日2006〕のⅡ期の可能性が高い。しかし、古墳時代後期以降にこのような小形の甕がある可能性も十分指摘できるため、ここでは6～7世紀頃の広い時間幅で考える。斐太遺跡は、弥生時代後半～終末にかけての集落のため、集落の堅穴式住居跡から6～7世紀頃の土器が出土したと考えるのは困難である。そのため、ここでは斐太遺跡周辺で出土したと指摘するにとどめる。

斐太遺跡の周辺では、初期官衙として注目される栗原遺跡が所在しており、7世紀末～8世紀前半を中心に瓦や赤彩土師器などが出土している〔坂井1981・1982、佐藤2005ほか〕。齋藤氏旧蔵土師器とは、時期・距離的にも近いと、何らかの関係も考えられる。

今回は、詳細な検討を行うことができなかったが、その来歴をはじめ重要な資料である。（金田拓也）

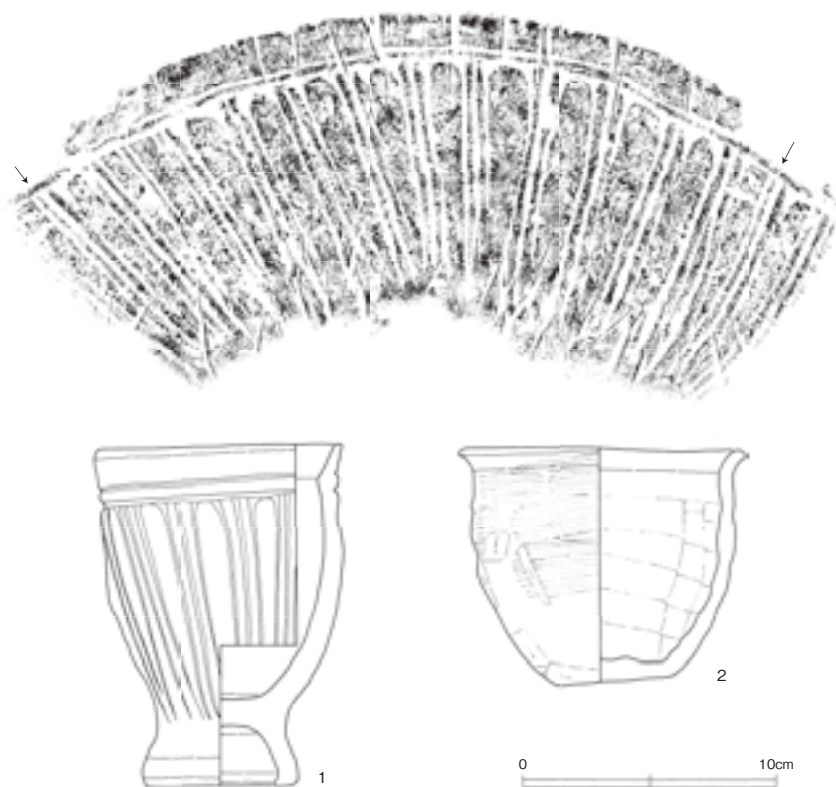


図1 縄文土器・土師器実測図（1/3）